
森で

吉沢拓磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

森で

【Nコード】

N0393Z

【作者名】

吉沢拓磨

【あらすじ】

旅に出た二人組が遭遇したお話。

で、ここ何処だ。

雪の中を駆け抜けて数日。俺達は今いる現在位置が分からなくなっていた。

道沿いに走ってきたが、本来の目的である川沿いには出られなかった。地図を見ても、目印が何も無いから判別出来ない。

というより早い話、森の中なのだ。

「ルリ、どうするんだ。位置、割りだせるか」

「羅針盤ねー。位置は分からなくても、方角ぐらいは分かるわよ」
そう言って袋から取り出したのは、こいつの七つ道具の一つ。羅針盤。普通ならただの物だが、こいつのは術式で動くようになってる魔法具だ。お手製らしい。

「風土木火金水、自然を司る精霊よ。ここに宿りし力と共鳴し、我らの進むべき方向を示せ」

起動文を唱えた事で、カリカリと音を立てて板の中央の円が回転を始める。しばらく回った後、矢印がピタリと止まった。

「東に川が走り、南に町。東南に街道が走っている。北から西南西にかけて山」

何の事やら訳の分からない板から、これだけの情報を読み取るこいつはすごい。

じゃあ次は俺か。

「東に川だとすると…。ルリ、進行方向はどっちだ」

「えっと、南」

南に町を見、東に川、東南に街道で西から北は山か。そんな場所はこの地図上では一ヶ所しかない。

「俺達がいるのは、どうもルウエの森らしいな。道理で薄気味悪いはずだ。ここ、良い思い出無いからな」

「ルウエの森…ねえ。って、ちょっと待って、ルウエって！」

「そう、あのルウェさ」

ルウェとは、この国における悪神の総称。そしてこの森は、その持ち物。究極なまでに縁起の悪い土地だ。

「ここは確かルウェの中でも面倒なブースじゃないかなあ」

基本的にルウェは一体で全ての悪を表す。他の善神は分担しているがな。ま、悪神の中にも個人持ちの奴はいる。数が少ないだけだ。「どうしてそう思うの？」

「出口が無い。毒草だけ。迷い込んだら森から出るのでさえ一苦労。多分この領域はそういう所だろう。というか、ここ、前にも来たから」

二度と来たくなかったのに。神経逆撫でされるから嫌いなんだよ。「出られる？まあ…出られたから村にあんたはく「事が出来たんだ」けどね」

「迷路を解くのと同じさ。磁石がある奴とかは逆に迷うんだ、ここ」「つまり、勘と思い付きって事？」

「そういう事」

ルリには言っていないが、ここの毒草の中には定期的に毒素を空气中に放出するものがある。時間はまだ間に合いそうだからいいけれど…。

「だったら早く行こ。そうねー…こっち！」
指差した方向は向かって左。

その時俺はうつかりしていて気が付いていなかった。

茂みの中で光る、何組かの目に。

駆けても駆けても景色が変わらない。だから俺は森が嫌いだ。それは何時でも同じ。もちろん、今もだ。

「ルリ、次の角を右に曲がるぞ」

「OK。出口まだかな」

「その質問は無意味だと分からないか」

「えー、でももう一刻以上こんな所を走っているよー」

「ここは止まっていると死ぬ森なんだ。止まると、すぐに触手が伸びて来る。お前もこんな所で死にたく無いだろ」

「そりゃそうだけど…」

「ならつべこべ言うな。嫌なら置いていく」

そう言ったら、血相変えて追いついてきた。そんなに置いて行かれるのが嫌なのか。

進行方向に対して左手側に山が見えてきた。という事は、森の境界線が近いという事だ。つまりそれは、他種族と鉢合わせするかもしれない、という事でもある。今みたいな、体力の消費の激しい事をした後だと対応に差が出てくる。馬にも無茶苦茶な事はさせられない。はつきり言う。出会いたくない。

それに、直感がさつきからひっきりなしに警鐘を鳴らし続けている。断定は出来ないが、恐らくどれかが放出準備を始めているはずだ。時間が無いな。

額を汗が流れていく。焦りは禁物だ。

「ルリ、先に行け。それと、合図をしたら何時でも鼻と口に覆いが出来るようにしておけ。バンダナとかスカーフで良いから。外気を吸いこまないようにするだけから。もちろん馬にも」

「なんで？」

「この森、毒を放出する草が自生しているんだ。すっかり忘れていた」

ルリの顔が一気に青くなった。

そして、ものすごいスピードで装備した。…いや、まだ大丈夫だから。

先を駆けていくルリを目で追いながら、後方へと気を送ってみた。今の所は何も無し。前方も無し。今の所は文句無し。と言いたいが、上空はまた鉛色。毒の粒子は色があるから普段ならば判別出来るが、悪天候の中だと掻き消されて気付くのが遅れてしまう。

森の出口まではもうすぐだな。出るまで待つてくれるかな。

その時、俺は首筋にもものすごい殺気を感じた。後ろからじゃない。木の上からだ！

俺を取り囲むかのように姿を見せたこいつらは、ゴーレムとファミリアとゴブリンだ。なんて混成部隊だ。…訂正。二部隊だ。小鬼は正気の奴らだな。普通に俺の装備狙いだ。問題はもう一部隊だ。恐らくラリった奴の放った奴だ。目が死んでいる。多分、この森の毒気で中毒症状を起こしている魔術師。しかも年季の入った中毒症状だ。で、キレかけると手下に森の中にいる奴らを襲わせて…あとは知らない。

ルリは、こんな状況下に俺がいるなんてこれっぽっちも気付かないでどんどん先に行く。俺も止まらずに先を急ぐがなんせ邪魔が入る。森も騒ぎに気付いたらしく、手を伸ばしてきた。確実にやばい。馬には既にマスクは付けてある。これで毒が来ても（来てもらっちゃや本当は困るが）一応大丈夫だ。ルリも装着しっぱなしにしてくれているみたいだ。一安心。

その時だ。ピタリと馬の足が止まってしまった。いや、止められた。森の手が絡まったか。そのまま横倒しにこける。俺も一緒に放り出された。それを狙っていたかのようにどんどんこいつらの手が伸びて来る。馬は、まだ生きているから森に取り込まれていない。こいつら馬には目もくれない。目的は俺だけかよ。

どうしろって言うんだ。そう思った時だ。不意に荷物がカシャンと金属音を立てた。何を入れていたかすぐに思い出せた。親方お手製の剣だ。まさかこんなに早く使う事になるとはな。

俺が手にした銀の光を見てゴブリン達は一目散に逃げて行った。いや、その後ろだ。

「マジかよ…。来ちゃった…」

毒の粒子の放出が始まってしまった。残った奴らはイライラが最高潮だ。

クラブったら何呑気に道草食ってるのよ。急げって言ったのはあなたでしょう。それを何呑気に…。前言撤回、大変よ、これ！

「式！」

呼び出した式に馬の見張りを頼んで戻った。あいつを救える方法は、それしかないもの。

何でもっと早くに気付かなかったのかしら。

薄い緑と濃い黄色の粒子のせいで敵の位置が把握しにくい。しかもこいつら、どんどん凶暴になってきていやがる。この二つじゃないとすると残るは…。あの真紅の最も猛毒の奴かよ。あいつには即席マスクは効果無しなんだよな。それまでに倒すか。

まず手始めにゴーレムから。こいつらは心臓を抉れば後は崩壊する。問題は心臓が左右逆の位置にあるって事だ。ここにいるのはざっと十体。何とかなるか。

「手加減しろよ…」

剣、使った事が無いから。

馬で駆けた道を自分の足で戻ろうとするとかなり時間がかかるものね…。間に合うかしら。というよりも、もっと早くに気付けばそれだけ早く引き返せたんだけどな…。ま、今更悔やんでも遅いっていう事も分かっているんだけどね。でもやっぱり…。ね。

気配的にはゴーレムとファミリアか…。ゴーレムは倒してくれてあるみたいだから、ファミリア封じすれば良いか。ファミリア封じなんて、使った事殆ど無いっつーの。

後三体…。

目の前の奴がチリの様に消えていく。肩で息をつく隙に来た二体を、体を捻って避ける。

「トロイのか早いのかはつきりしろよ」

避け際に背中から刺す。

後二体…。

使い魔の奴らは何故かじっとしている。恐らく俺がゴーレムを全て消してから襲いかかる算段なんだろう。せこい。というか、ズッコイ。

ルリの奴、戻ってくるかな…。もしこいつらを全部倒すまでに戻ってきたら対処できるかも知れないが、戻ってこなかったり全部倒してからだったら、体力的に怪しい。

後ろの空気が動いた。お前らばれてるんだよ。

「だからセコイって言ってるんだよ」
後一体…。

こいつをどうするかで大きく変わる。使い魔をどうするかを考えの方が良いかもしれない。森の手はさつきから足首を掴もうとしてきている。マズイしヤバイ。止まると危険だからな。

振り翳された手を避けて、立ち上がりざまに刺し抜く。

作戦成功。

でもどこがだ。

使い魔はまだ動き出さない。指示待ちだろう。

「いい加減にしろよ。鬱陶しいんだよ」

馬はまだ元気だ。捕らえられてはいたけれど、結局取り込まれなかったらしい。良かった。こいつがいるかいなかで、旅の効率は上下する。捕らえていた蔓を千切り、解放した。

「しばらく先に行っておけ。ルリの奴、分かるだろ。そいつの言う通りにしろ」

小さな黒い瞳が賢そうに瞬きして、こっちを見た。

「行きな」

そう言うのとくると向きを変えて駆けて行った。見送った俺は、ファミリアの奴らの動きが無い事に不信感を抱きつつ立ち上がろうとした。でも、まるで後ろから引っ張られているみたいで動けない。森の手、しかもその中の木の手だ。俺が離れようと暴れていると、使い魔が大きく足払いをかけてきた。

「あ…ヤバイ…」

足が上がる。地面から離れる。手はチャンスだと思つ。引つ張られる。木に叩き付けれる。木の手は勢い良く伸びて俺の体を捕らえると、木の中へ入れようとす。そしてそれと同時に、何のつもりかは知らないが、傷口に細い触手を入れてきた。耳元で木の皮がメキツと音を立てた。体の下にあつた樹皮が姿を消す。

吞まれ始めたんだ…。

「本当にお前等性悪だな…。いや、お前等の主が性悪なんだな。人が、森に喰われる所を見るなんて」

木に喰われるか、真紅の粒子で死ぬか、どっちが早いかな。あの粒子、他の種類よりも時間かけて放出されるから…。もうじき来るはずなんだ…。

クソツ、こんな所で死ぬのかよ。旅始まつた所だつて言うのに。

あれ…まさか。いや、まさかな。あいつが戻ってくるなんてそんな訳あるものか。

まだ時間あるわよね…。

ゴーレムは全て消えた。ファミリアはまだいる。でもそれよりももっととんでもない事になつてゐるって何よ。どうして、まだ生きているモノを取り込もうとするのよ。いや、人だけどね。私もよく分からないけれど、ここの森で死んだ奴とかを栄養源としているんじゃないの？確かに、クラブは止まると死ぬって言ってたけれどさ…。それにしてもおかしいわよ。

「間に合つて…」

馬が戻ってきたつて言う事は救いだつた。恐らく、すぐに走る事になるでしょうから。

草むらを抜け、角を曲がると見えてきた。

ちよつと待つてよ、もうそこまできてるの？！

「ブレイク・ファミリア！」

そんな訳あった。あいつだ。

木は大急ぎで俺を樹皮の下に入れようと、スピードを上げた。そんなことしなくても、俺はもう身動き一つ出来ない。

あいつ、どうするつもりだ。

「クラブ、クラブでしょ？！大丈夫、まだ生きてる？！」

「…縁起でもない事を言うんじゃない」

「良かった、間に合ったー。ファミリアは全部払った。急いでここから出してあげる。ちよつと待って」

「どうするって言うんだよ」

「こいつも木の一種でしょ？その性質を利用するの。しかもこいつ、良く見れば本物じゃないわよ。馬を止めたのもこいつ。全部あの使い魔の主のクソ野郎の仕業よ。」

あ、ちよつと目、閉じといてね」

「何で」

「これ使うから」

ボツと音を立てて掌の上に炎を出した。こいつ、魔術師の中でも高位で万能だからなあ。

「分かったよ。好きにしろ」

諦めて目を閉じた。目の際まで来ていた樹皮がこれ幸いという風に覆いかぶさってくる。その時、あいつの火炎弾が当たった。術を破壊されたから、今までのがまるで嘘みたいに樹皮が消えていく。木その物が消えていく。足元に足場が無いからこけそうになっただけ。いや、立てないんだ。

「ルリ、肩貸してくれ」

「というより早く馬に乗れば。早く立ち去った方が良いんじゃない？」

「多分な。でも俺、今立てそうにないからなあ。そっちもやばいなあ」

「ならグズグズするんじゃない。手伝うから」

「結構だ」

実際、馬に乗るぐらいは出来た。馬を走らせたのはルリだけだ。

森を出てしばらくすると、ルリの馬と式が安全な草原で待っていた。

ほっとしたのか、目が回ったみたいにグラグラする。馬から降りて、すぐに地面に倒れ込んだ。

しんどい。息が荒い。頭痛い。散々だ。

「貧血…かな」

「…へ」

「さっき傷口から血、吸われたんだと思う。しばらく横になってたらマシになると思うけど、もう夕方よね。野宿する用意するか」

「…こんな所でよ」

「だってあんた動けないじゃん。今は無理に動かない方が良く思うよ。さっさと治したいのなら、ジツとしておきなさい」

草っぱらに俺を放置したまま、あいつは寝れそうだなおかつ安全そうな場所を探しに行った。まったく。傷まみれな俺はどうでもいいのかよ。

ま、あいつがあの時戻ってきてくれなかったら、俺は今頃どうなっていたか分かったもんじゃないから、今回は別に良しとするか。気分的には複雑だけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0393z/>

森で

2011年12月1日16時59分発行